第２回　研究会より

参加者　15 人

☆1　　田子浦中学校の視察報告

10 月に笹原さんが、富士見市の田子浦中学校に視察に行かれました。そのときの共同の学びの様子や、佐藤　学　教授との会話したことについてご報告していただきました。

報告の骨子

1　まずは本の紹介。

笹原さんがこれまで授業について悩んできたこと。その答えを見つけるために多くの書籍を読んだこと。その書籍の紹介をしていただきました。教師として授業作りの力を伸ばしたいという思いは、教師なら誰でも持つでしょう。笹原さんのお話は、多くの経験を積み重ねた今も、授業作りを模索していることに参加者一様に共感したように思います。紹介なされた本については、ブログの方でも過去のメッセージを見ていくと見つけられます。是非、年末年始休業などで、読んでみたいものです。

2　本地区の『共同の学び』の広がりについて

佐藤　学　教授との会話の中で、他県の『共同の学び』による学校づくりの様子について話があったそうです。その中で、山形県は、広がってきているという佐藤　教授のお話だったそうです。ただ、笹原さんとしては、あまり急激な実感はない。確かに本地区において、『学びあい』を研究テーマに据えて実践している学校は十数校になっている。教育事務所や県の義務教育課も『共同の学び』を意識した考え方になってきている。

これまで、佐藤　学　教授に質問したこと。

・　平成 12 年に角川小中学校に招いたとき。

Q 教師はどうやったら伸びるのか？

A「先輩から学ぶんだ」（佐藤　教授）

瞬時に答えが返ってきたとのこと。授業作りが生きていると、子どもたちが授業に参加してくる。学校内外の研修会に積極的に参加することが大切だと感じたそうです。だから、本研究会のようなサークルによって、学校の壁を越えて研究することは意味が大きい。

・　平成 19 年浜之郷小学校の研究会に参加した中で
Q「佐藤　学　先生抜きで、授業作りを深めるためにはどうしたらよいのか？」
A「・・・・。続けていけば大丈夫」（佐藤教授）
この質問には、やや答えを窮していたようだとのこと。私も佐藤　学　先生の話を目の前で聞いたことがあるが、その視野の深さや視点の多さに、驚き以上の感動を覚えたものです。このようなアドバイザーが年中いらっしゃる学校は本当に恵まれています。でも、多くの学校では、そうはいきません。特に田舎になればなるほどです。笹原さんは、つまるところ、このような研究会で、いろいろな考え方の人たちと議論しながら、自分を鍛えるしかないと話をしてくれました。

3　田子浦中学校を視察して
「とにかく、女子と男子の関係がよいのには驚いた。400 名以上の学校ではあるが、どの生徒も学びに参加している。こんな学校ができるんだと、感動を覚えて帰ってきた。」という話をしていただきました。
次に、笹原さんがレジュメを渡して、田子浦中学校の様子やそこの研究会で佐藤　学　教授が話したメモを配布してくれました。

4 人グループになって、その資料を読んだ感想を話し合った。
その後全体での討議にすすんだ。

「わかると同姓同士話をする、わからないと異性との話になる」という点はどうなのか？という論点が出た。
「なんとなく理解できる」と話す参加者もいた。

笹原さんから、グループの机の中での男女の配置が紹介された。

男　　女

女　　男

実はこの並びも仕組まれているのではないかという話があった。
ここで高橋から、以前漫才師のコンビが飲み会で座る配置について、同様のことを考えさせることを話していたことが紹介された。

「レベルの高い授業を通して、底上げをはかる」という考え方はわかるが、実際にはなかなかイメージがつきにくいという論点がでた。
数学の先生の話、国語の先生の話が紹介された。
授業をどのようにデザインしているか、そのデザイン力の難しさを数分議論した。

☆2　ビデオカンファレンス

今回はおよそ 20 年前の『授業』というビデオの中の算数を視聴した
内容
課題：信頼されるレジ係になろう
児童全員に電卓を配り、教師がお客となって、値段を計算されるという、非常にシンプルな授業。ただ、そこに、足し算と掛け算の順序性をちりばめ、児童が提示する値段がばらばらになる混乱性を仕組んでいく中で考えさせるという授業。

ビデオの視聴のあとグループ討議
今回はざっくりと感想のみの討議をした。
その後全体にして、参加者全員からの感想を出し合った。

・　クラスの中で前列の男の子と後ろからひとつ前の女の子が気になっていた。男の子は、

比較的できる女の子のとなりでニコニコしている。後ろの女の子は、課題が難しくなるにしたがい、目つきが変わった。そのあたりをできるならば授業者に聞いてみたいところだ。

- 電卓を取り扱うことで、児童誰にでも安心感を与えているのではないか。
- この授業は計算力を問うのではなく、計算の過程を着目させることが狙い。だからこそ電卓を使用することで授業自体がシンプルな構造にできている。
- 「電卓＝正しい」というのが今も残っている。電卓を使う場合、“見積もり”をさせるのが大切。でなければ、間違いが見えてこない。途中の児童の発言にあった、「おおよその数から、違うと思った。」という発言は大切。
- たいてい、この授業ならば、教師は“計算の順序性を考えよう”という課題を設定すると思う。ところがビデオでは“信頼されるレジ係”だった。この授業者の課題と児童の課題が離れているのがすばらしい。もっと課題の提示について研究していく必要がある。
- 答えがばらばらになったときの、児童に混乱が生まれた瞬間がみていて面白い。空気感が一気に変わった。
- この授業を 20 年前にやっていたことがすごい。正解を出すことが大切なのではなく、正解を出させた後、それを式という言葉にすること。わざと間違いをおこるように仕組む授業。これらは、当時としては思い切ったものだったろう。今ならばもっと進んだ授業をする教師はいるかもしれないが、当時はそのような授業を行ったことに挑戦を感じる。
- 最後に笹原さんから、このクラスにいる特別支援が必要な児童がいたこと。その子は足し算しかできなく、掛け算になると授業から離れてしまったこと。でも、再び授業にもどってきたことなどが、ビデオをみながら確認して、本日の授業を閉じた。

丹さんからの差し入れ。あんこのおはぎ。戸沢村のおいしいおはぎでした。心遣いありがとうございました。

戻る